

「大阪城東部地区まちづくりの方向性（案）」パブコメ

4月28日に公表された「大阪城東部地区まちづくりの方向性（案）」は次の6項目から構成されている。1 大阪城東部地区（以下、地区と略）の現況と動向、2 地区のまちづくりコンセプト及び戦略、3 コンセプト及び戦略を受けての展開イメージ、4 土地利用・基盤整備計画、5 想定される開発の進め方、6 2020年度以降の取組み。

パブリックコメントの「意見」をまとめるために目を通したが、疑問に感じることが多い。とりあえず4点だけ指摘しておきたい。

・4ページの「これまでのまちづくりの経過」（写真）に関連して、大阪城東部地区のまちづくりの方向性（素案）と新大学基本構想、なかでも森之宮新キャンパスとの関係がはっきりしない。なぜ、新キャンパスが森之宮の「もと建替計画用地」なのか。近隣団地から大学キャンパス計画予定地を眺めたが、約7千人の学生・教職員が集う場としては狭い。

・9ページに「イノベーション・コア」は、「大学の基本機能」+「大学が先導役となり展開する機能」を中心に構成している。後者に重点がおかれ、大阪城東部地区のまちづくりのテコとして、新大学が利用されている。「大学の基本機能」の方は、ある意味で「付けたし」の感じである。

・新大学基本構想とともに、直前に策定された「大阪スマートシティ戦略」も、東部地区のまちづくりに押し込んだ形になっている。全体として、はじめに跡地開発を活用した土地利用転換（土地ころがし）、大規模再開発があり、新大学やスマートシティなどが「あと付け」的に並べられている印象をもった。

・2ページのように、南北軸とともに東西軸を構想するが、東西軸は夢洲・森之宮開発がメインである。両者ともイベントやハコモノを起爆剤にした新規の土地造成・土地利用転換である。同時並行的に大規模な事業を実施することは、巨額の財政負担を伴う。新型コロナ禍で、経済・財政見通しは大幅な修正が求められており、こうした「不要不急の」施策、開発見直しは不可避である。

大阪城東部地区のまちづくりに関心をもったのは、大阪市立大と大阪府立大が統合再編され、森之宮地区に都心キャンパスが計画されるからだ。この「方向性（案）」をみると、大学再編を利用した大規模な都市改造であることは明らかだ。検討を続けたい。

(2020年5月8日)

